



勉強会に集まってくる子どもたち。井坂さん1人で教えるには、10人が限界だ



新しい教材を取り入れて授業を行っているシャカリバティ小学校。「小学校理数科教育強化計画プロジェクト」では、教員研修や教材の開発などを通じて小学校理数科の授業の質の向上を目指している

村の子どもたちに「勉強する?」と尋ねる井坂さん(右)



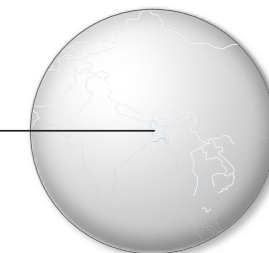
# FIELD SKETCH

## 子どもたちに 分かりやすい 理数科教育を

初等教育の普及に力を入れるバングラデシュ。しかし、小学校に入学しても、途中で通わなくなってしまう子どもたちが多い。その背景には教育の質の問題がある。子どもたちが楽しく勉強を続けられるよう、特に理数科教育の改善に取り組む日本人たちに現地出会った。

文・写真 = 谷本 美加 (写真家)  
text and photos by Tanimoto Mika

バングラデシュ  
BANGLADESH



### ランプの下で算数の勉強会

日が暮れかけた午後5時、バングラデシュの首都ダッカから車で2時間ほど離れたマイメンシン県バルカ郡の小さな村で、7〜8人の子どもたちが集まって勉強会が始まった。きれいに掃除された民家の庭にビニールシートを敷いて、ベンガル語の数字を覚えたり、二けたの足し算をしたりしている。先生は、青年海外協力隊の井坂剛さん。流暢なベンガル語で、背中を丸めて子ども一人一人と顔を寄せ合いながらノートに向かう姿が印象的だ。

教育が義務化・無償化されて以後、2001年には97%の子どもが小学校へ入学するようになった。このバルカ郡の村の勉強会に集まった子どもたちもみんな小学校へ通っている。しかし、父親や母親はほとんど初等教育を受けることができなかったため、子どもが自宅学習をしても、教えてあげることができないのだ。いわば井坂さんは、村全体の家庭教師のような役割を果たしている。

で、自分にできることは何かと模索しながら、毎日のように小学校へ通い続けた。そこで、暗記中心の授業、ついていけない生徒がどんどん切り捨てられてしまいう授業を目の当たりにする。悲しいことに、時には、先生が来なくて授業が始まらないことも。そこで井坂さんは、学校を変えたいという



子どもだけでなく、母親たちに教育の重要性について話をするのも大切なこと。井坂さんは「鉛筆とノートだけは買ってあげて」と伝えるようにしている



### 細腕でレンガを運ぶ子どもたち

田畑や低地に水が氾濫する雨期が6カ月、一転して一滴も雨が降らない乾期が6カ月、これがバングラデシュの気候だ。

乾期になると低地の水は見事に引き、そこにレンガ工場が現れる。この国のレンガ工場は乾期の11月から3月の間のみ稼動するのだ。

ダッカ市内を流れるプリゴンガ川沿いの、あるレンガ工場では、マイメンシンからの出稼ぎ労働者ばかり200人ほどが、早朝6時から夕方5時半まで、レンガ作りに精を出していた。

中には、何人もの10歳前後の子どもたちも含まれ、1つ4キロのレンガを4個以上は頭に載せて、小走りに巨大な窯へと運んでいく。収入は、2回運んで1タカ(約1.8円)、少なくとも乾期の間は、学校へ行くことはない。村には、無償の小学校がもちろんあるが、5カ月の出稼ぎの間、授業はすでに先に進んでしまっている。これでは、一度入学しても続かないのだ。

小さな体を労働から解放するために、貧困対策、農村開発、質の良い教育など、より一層の効果的な対策が必要とされる。



1つ4キロのレンガを頭に載せて運ぶ少女

特に、先生たちにとって教えることが難しい理科の分野は天文や気象の単元だ。この国の先生は特に教科書に対する依存度が高いにもかかわらず、天文の分野では「月の明かりは、心を喜びで満たしてくれませう」という詩のような表現があるかと思えば、太陽系を表現する絵が正確ではないなど、改善すべき点は細部にわたり多数ある。

加えて、「この国では教育関係者の縦のつながりがなく、この国の文化を壊していく



小学校理科数科教育強化計画プロジェクトの専門家やスタッフたち。活動拠点であるマイメンシンの国立初等教育アカデミーは、バングラデシュの教員訓練や教育内容改善の役割を担っている



国立初等教育アカデミーの専門家マズハルルさん(左)と新しい教材開発の検討をする相馬さん

バングラデシュの初等理科教育改善を目的として、マイメンシン県の小学校教員養成・研修機関、小学校を対象に、教科・教授法の研修の実施、授業力リキュラムや評価手法の改善などを通じて、教員の指導能力の向上を図る技術協力プロジェクト。  
URL: <http://project.jica.go.jp/bangladesh/0511146E0/index.html>



相馬さんが発案した、太陽と月の関係を示す天文の教材。暗い教室で裸電球が地球儀を照らすと、地球と太陽の関係が一目瞭然になる

ながりがほとんどないのです」と相馬さんは指摘する。イスラム教徒が8割を超える国だが、インドのカースト制度の影響が強く、職分・身分の区別がはっきりしている。それが、教育の現場では、国立初等教育アカデミーと教員養成校・現職教員研修機関・学校などの連携、あるいは、学校内の教員同士の協力や連携を弱めてしまっているのだ。よって、それぞれ

のと同じようなことだと、一筋縄ではいかないこのプロジェクトの難しさを話す。一方で、バングラデシュには、たくましく情熱的な人々が多い。さまざまな壁はあるが、自分がこの国を去った後も、現地の人々が自らの力で活動を継続してくれることを、相馬さんも井坂さんも願ってやまない。



井坂さんが村で勉強会を始めるきっかけとなった少女ルマさん

2000年度に実施された「初等教育において児童が習得すべき能力調査」によると算数の理解度が11・6%と驚くほど低

だ。JICA専門家・相馬敬さんだ。彼は現在、バングラデシュの教育訓練や教育内容改善に関して主導的な役割を担う「国立初等教育アカデミー」で、生徒が理解しやすい授業を先生たちにしてもらうための授業案や教材の開発に携わっている。これまでの授業は、教科書が分かりづらいことに加え、その教科書を先生が一方的に読むというスタイルが多かった。その結果、理科の理解度が17・3%という、算数に次ぐ低さなのだ。



日常生活にはまったく困らないベンガル語も、すべての科目を教えられるほどではない。しかし、算数だったら教えられない。そうして算数中心の家庭教師が始まったのだ。くしくも、

調査によると、97%が小学校へ入学しても、5年後に卒業する子は3分の1程度という結果が出ている。経済的理由から、子どもが労働力として駆り出され、学校へ行けなくなるケースも確かにまだあるが、むしろ、子どもが学校をやめる理由は教育の質の低さだといわれている。

「バングラデシュの子どもたちには非常に分かりにくい説明や実験が、小学校の教科書に書かれているのです」と話すのは、マイメンシンで「小学校理科数科教育強化計画プロジェクト」に携わる、理科教育分野の

### 先生の能力向上が課題

一方で、入学したものの、授業が分からず学校をやめてしまつ子が多いのも現状だ。調査によると、97%が小学校へ入学しても、5年後に卒業する子は3分の1程度という結果が出ている。経済的理由から、子どもが労働力として駆り出され、学校へ行けなくなるケースも確かにまだあるが、むしろ、子どもが学校をやめる理由は教育の質の低さだといわれている。



小さなランプの周りにノートを寄せ合って勉強する子どもたち

子どもたちの理解度を上げるために

い。これは分かりにくい学校の授業に起因するといわれ、子どもたちの勉強不足によるものではないのだが、「子どもたちと親の意識が変わってくれば、学校の先生の教育に対する意識も変わるかもしれない」と井坂さんは期待している。

勉強会が始まって1時間もすれば、電気のないこの村は闇に包まれる。かろうじて一冊のノートだけを照らす弱いランプを囲んで、無数に飛び交う蚊など誰一人気にも止めず、算数の勉強会が続いていく。